
風

蒼速滝希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風

【著者名】

N4145C

【作者名】

蒼速滝希

【あらすじ】

風は何故吹いているのか・・・。どこへ向かっているのか・・・。

風

第一章 風の申し子

風が吹いた。

その風の持つ「想い」を感じたのはこの大都会のあふれる人々の中のうちの何人なんだろう・・・。

この風はどこから吹いてきて、どこで何を見て、どんな想いを抱き、そして今この場所を通り過ぎ、さらにどこへ向かつて旅していくのか・・・。

「つてかこの中でこんなこと考える人すら他にいんのかね・・・。」

「・・・そつか。みんな忙しすぎてそんな事考える暇なんてないつてか。」

呼びかけに応えるように風が吹く。

「みんな・・・かわいそудな・・・。」

勝手な思い込みかもしれない。でも・・・。

「俺様みたいな心に余裕のある人がここにはいないのかね・・・。」

風が吹いた。夕日に背を向けた彼に向かつて。

・・・早く帰るべき場所へ帰れよ・・・

「・・・はいっす。」

彼は小さく手を振った。

彼は自分の家へと戻る。

彼が先ほどいた大都会の喧騒とは裏腹に、彼が住む場所の周辺は静かであった。彼の家の田の前には山がある。

彼は家の前にある山を登つていった。

まだ小学生の頃、彼はよく何人かでこの山を登つた。もっとも今はその何人かも全く別々の道に進んだわけだが。ふと足元を見る。彼の足元にはその頃に自然に出来た通り道は今もかすかだが残つていた。その頃、彼らはどうして毎日のようにこの山を登つたのか。それは彼が今までにこの山を登つてている理由でもあった。

大体50メートルぐらいだらうか。当時の彼らにとっては一苦労だつた道のりが今の彼にとつてはあっさり登れる道のりとなつていた。そのためか危うくもう20メートルぐらい登つてしまいそうになつた。

「はは・・・。時の流れつてありがたいと想うときもあるんだな・・・。」

本心なのか冗談なのかわからない言葉が口から漏れた。

「・・・懐かしいな。あの時とほとんど変わりやしない。この風景は相変わらずだな。」

目の前に広がるのは彼が生まれた海沿いの町の風景だった。ぽつぽつと家がならび、小さな川は海へと流れ着いていた。その海も今は夕日の輝きを受け輝いていた。その海に相反するくつきりとしたコントラストを演出するのが高い山々だった。

彼らはいつもこの景色を、風景を感じ取っていた。
彼らが景色以外に感じ取るものの・・・「風」

風はいつも違う吹き方をする。

それは、言葉に表せないが少年の彼らはせつひとつとの変化を感じ取ることが出来た。

・・・今現在ここにいる彼にも。

「あいつら全員引つ張つて来りや少しは話出来んのかな・・・。」

懐かしい者達。今は何をしているだろ？

心と表れた

「俺様みたいにはおおまかな生活送ってるヤジなんでしちゃうなんでもおひんよな・・・。」「

「今頃、何してんだろな・・・。」

やうと思ひたとせた

「あれえ〜? タカヒロさま〜?」

後でから声がした

久 い ぶ り の 再 会 ご つ

積谷由衣佳。記憶の中に残っている名前だった。この山を登ったメ

「久々ぶりいり。」が「久々ぶりいり」の異名の一例と見なされる。

つて呼んでるんだねえ」

そういうえばいつだつたかな・・・。自分のこと俺様って呼び始めた
のよ・・・。

そう遠くない田の話だつたような・・・。

「さてが由衣佳は帰ってきてたのか・・・・」

「いじらせる。違つむ。」

「じゃあ、あれからずっとここにいたのか？」

「うん・・・。私、タカヒロをみたいにいろいろあつらつち放浪するような勇気ないから・・・。」

「・・・。」

放浪か・・・。そういえば自分は最近何かをする事にも無くふらふらと出かけることが増えたような気がする。

学校も休みに入り、学校に行くことも無くなつた。

「つていうか学校行くつもりじゃないのにどうしてタカヒロをまは学ラン着てるの〜？」

特に理由は無かつた。

「いや・・・。なんとなく。つてかどうしてお前も制服なんだ？ 部活か？」

「うん。今部活から帰つたばかりだよ。」

「成程・・・。」

「つていうかさあ〜。そんな暑つ苦しい格好なんかしてないで、上着くらいい脱いだらあ？」

暑苦しい・・・。彼は特にそう思つたわけでもなかつたが、学ランのボタンをはずし、脱いだ上着をそつと傍らに置いた。

すると、由衣佳が一言。

「あれ？ そのネクタイ校則だっけ？」

「・・・。うん・・・。」

「学ランの下にネクタイ・・・。正直変わつてる・・・。」

「・・・。」

別に変わつてるとは思わなかつた。正直最初はそう思つたかも知れないがどちらにしろ慣れているのだから。

しかし、由衣佳もあの頃とはずいぶん変わつたような気がした。

中学校まで同じだったメンバーもそれぞれ別々の高校へと進学した。それつきり会うこととは無くなつた。

誰とも再会することは無いだろ？。この広い世界の中で誰かと出会いうといつのは非常に低確率。まさに運命といつ言葉でしか説明の出

来ないことである。なのに、一度別れて連絡先すらわからない人に再会するなんて無理だと思っていた。

まあ一度おきた再会である。今回だけであろう。

ほんの一瞬、今別れたらもう由衣佳どころか誰とも一度と会えないよつな気がした。

「……じゃあ、もう遅いし帰らなきや。ばいばい。タカヒロやがあ～。」

「ああ……。」

由衣佳は山道を降りていった。

一人、夜空を見た。

星が見えた。

無数の輝きが空を覆いつくしていた。

「おー、あの星見ろよ。今流れたぜ。」

「ホントに? どこ? 」「? 」

「ほら、あっち! ー! ー! 」

「ホントだ! ー! ー! 」

「ええ? どこだよ? 」

微かに幼き頃の記憶が蘇る。

風が吹いた。

「懐かしいな・・・。本当に・・・。今日せひの風景が本当に懐かしく感じる。」

・・・帰るべき場所へ帰れたのか・・・

「・・・そう・・・かな。まだ曖昧すぎてよくわかんないな。」

・・・まだわからない・・・か。それもいいだろ。ゆっくり考えろよ・・・

また風が吹いた。

彼はまだ懐かしさがする大地にそっと身を預けた。

その身に、不鮮明ながらもゆっくりと大まかに時の流れを感じながら・・・。

ひとつ、星が流れたような気がした。

一瞬の瞬きをはっきりと時の流れに刻んで・・・。

やがて夜は明け、朝が来る。そして日が沈み、夜が来る。
その輪廻・・・。

やがて朝を迎えるとしているこの場所に彼はいる・・・。

あれから何時間だったか。

「・・・寝過ごした。」

彼はあれからずっと山の上で寝ていた。口はもう高く昇っている。

彼はゆっくりと身を起こし、背を向けて山を降りた。

彼は、また昨日と同じように大都会の喧騒の渦の中にいた。特に目的は無かった。

単に風の声を聞きにここまで来た。それだけのことだった。

彼はまた、昨日と同じように山を登った。

まあ今度は登り越すなんてことは無かったが。

彼は空を見上げた。

海が見える町らしく、青空が広がっていた。

「今日はどんな風が吹くのかな・・・。」

ゆっくりと深深呼吸をして、その場に寝転がった。

風が吹いた

・・・迷いがあるか・・・

「いや・・・迷つてなんかないよ。ただ・・・したいことが見つからないだけ。」

・・・私を自由と思つか・・・

「うん・・・。君達みたいに、あらぬところを旅したい。何事にも縛られる」と無く・・・。そつ・・・。自由・・・。」

・・・旅をしたいか・・・

「うん・・・。自由」・・・。」

・・・私はある砂漠に近い国を見た。戦争をしている国だ・・・

「戦争・・・?」

・・・そうだ。そこで、偶然ある少年の姿を見た。その少年は一人で町を抜け出し砂漠の真ん中へと向かっていった・・・

「・・・。戦争から逃げ出したかったから・・・?」

・・・さあな。ただ少年は、水の入ったビンだけを持つて砂漠へと向かっていった。砂漠には一本だけ花が咲いていたんだ。少年はその花にビンの中の水を注いだ。・・・

「特別な思い出があつたのかい?」

・・・多分な。少年はその花を『みんなのはな』と呼んでいた・・・

「へえ・・・。」

・・・泣いていたんだ・・・

「・・・。」

・・・砂漠のど真ん中でただひたすら」・・・

「悲しかつたのかな・・・。」

・・・その後、少年はもと来た方向へと歩き出した。しかしながら歩みで歩いたところで少年は力尽き、そのまま倒れ、死んでしまつた・・・

「・・・。」

・・・砂のせいでどうな。音もせず、やっくつと。・・・

「・・・。」

・・・誰も気づかなかつた。彼のこと』。そして、『みんなのはなに水をやる者もいなくなつた・・・

「・・・。」

・・・風は、自由ではない・・・

「やつだつたんだね・・・。」

・・・それでも、旅に出たいと想つが・・・

「うん・・・。自分が想像できなことひたせ・・・まだまだたくさんあるんじょ・・・。だつたらこつそのじの田で見れるだけ見たいんだよね。」

・・・ そつか。ではお前を風の旅の供として迎えよつ・・・

「ホントに?」

・・・ ああ・・・

・・・ 風になれ・・・

彼は風に身を委ねた。

・・・ 還るべき場所へ・・・

風が吹いた

高く、青い澄み切つた表情で世界のすべてを「の田」で見る存在・・・

空へ・・・

第二章 空へ・・・

彼の目に映るものすべてが今まで彼が抱いていた世界のイメージを覆した。

「・・・これが・・・風の旅・・・」

・・・ そうだ。自らの眼で世界で起きて「る」との真実を見「る」と
だ・・・

「世界……君の話を聞くまで俺様はあの少年のことわざを知らなかつた。」

「……私もこの眼で見るまではな……」
「そうだね……。何も知らないんだ……。」この眼で真実を見るまでは……。人も風も大地も……空も。」

「……ああ……」

「君は……。どうして風の旅に?」

「……私もお前と同じだ……」

「へえ……。そうなんだ。俺様と同じ。」

彼は微笑んだ。

……風や空は世界の真実を見る存在だ。同時に大きな意味をもつ存在とも言われている……

「そうだね……。」

ゆっくりと高く舞い上がった。

彼らは空の彼方へと……

「みんなあ〜こつちこつち!〜」
「そんなにあせんなくつたつて」
「まあいいじやん。由衣佳ちゃんだつて久しづりだらうし気持ちはわかるよ。」

「……でも本当に久しづりね。このメンバーでここに集まるなんて……。」

「そうだな……。」

「ああ……。」

「着いたあ～！」

「懐かしいわ・・・。」

「懐かしいな・・・。」

「僕たちいつもここで景色見たりとかしてたんだね。」

「あ、私昨日こりでタカヒロさまにあつたんだあ～。」

「本当に？」

「タカヒロがあ～。懐かしい名前だなあ・・・。つてか来てないのか？」

「そうみたいだね・・・。」

ふと彼らの間を風が吹きぬけた。

「気持ちいい風～！」

「そうね」

「ああ・・・。」

「うん・・・。」

風は、彼らが気づかないほどやつと、地面に置かれていた学ランを持ち去つていった。

「・・・そういうえばタカヒロつてあ～。高3から5年間ずっと落ちてるんだよな・・・。」

「やうだつたの！？」

「うん。だからタカヒロは実質由衣佳ちやんと同じ学年なんだよね。

「うん。やうだよお～。」

「ホント、自由な奴なんだから・・・。」

「ああ・・・。筋金入りの・・・な・・・。」

・・・・・。

・・・時代の流れは恐ろしい・・・

「え？今なんか言つた？」

・・・いや。なんでもないわ・・・

と・・・。

ふと、学ランの名札が月明かりに照らされ光った。

そこに刻まれた文字がはつきりと読めるくらいに・・・。

【高木博義】

と・・・。

空高く舞い上がった学ランのポケットから一枚のカードが落ちた。

そのカードの意味を知るのは・・・。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4145c/>

風

2010年12月7日14時25分発行